

2025 年 12 月 20 日 月刊 第 329 号

非核・いしかわ

非核の政府を求める石川の会
TEL 076-251-0014 FAX 076-251-3930
<https://hikakuishikawa.com/>

非核五項目

- ① 全人類共通の課題として核戦争防止、核兵器廃絶の実現を求める
- ② 国是とされる非核三原則（つくらず、もたず、もちこませず）を厳守する
- ③ 日本の核戦場化へのすべての措置を阻止する
- ④ 国家補償による被爆者援護法を制定する
- ⑤ 原水爆禁止世界大会のこれまでの合意にもとづいて国際連帯を強化する

核兵器禁止条約の署名は 95 か国、批准は 74 か国（12 月 15 日現在）

1 面 日弁連・人権擁護大会・プレシンポジウム
日本国憲法から核廃絶を考える 五十嵐正博
3 面 核兵器禁止条約署名の共同提出と国会前
行動に参加 新井田義弘
能登町議会に核禁条約意見書採択を請願

4 面 被爆 80 年 平和の思いを次世代に
絵本「母と妹への手紙」 小原美由紀
5 面 <独標>チラシ 高久晴美
6 面 いのちを削り、社会保障を交代させる大軍
拡に異議あり 寺越博之

7 面 演劇鑑賞を通して 反戦・平和への思い
を 江口耕平
非核・平和の掲示板
8 面 金沢の写真師コーナー 橘 国夫
絵手紙コーナー 竹味燕子



石川県原爆被災者友の会元会長
西本多美子さん



日本反核法律家協会会長
大久保賢一さん

【報告】

日弁連・人権擁護大会 プレシンポジウム 日本国憲法から核廃絶を考える

代表世話人 五十嵐正博

一月八日、「平和を守る全国弁護士会アクションの日」の一環として、金沢弁護士会主催のプレシンポジウム「日本国憲法から核廃絶を考える」が金沢弁護士会館二階ホールで開かれました。登壇者は、「日本反核法律家協会会長」の大久保賢一弁護士、「石川県原爆被災

者友の会元会長」の西本多美子さん、「核戦争を防止する石川医師の会」の大田健志さん。西本さん、大田さんは昨年一二月オスロでの「日本被団協ノーベル平和賞授賞式行動ツアー」に参加されて以来報告会を重ね、一八回目の今回が最後になるようです。

【第一部】 私の被爆体験、ノーベル平和賞 授賞式行動ツアー報告

西本多美子

第一部では、大田さんの軽妙なリードのもと、西本さんご自身の被爆体験、ノルウェーの国会議員の前での被爆体験を語った様子などが話されました。議員は皆若く、「生の証言」を初めて聞いたのではないかとの感想を持たれたようです。一九六〇年「石川県原爆被災者友の会」が創設され、岩佐幹三さんが初代会長を務められました。岩佐さんは東京出張が多く、石川のことは西本さんに「丸投げ」だったとの逸話も語られました。

花鳥風月

「台湾有事は存立危機事態」との首相発言

は、日本に対する武力攻撃がなくても、自衛隊が米軍とともに中国に対する武力攻撃を行い得ると宣言したことには他ならない。これは日中関係の土台を揺るがす深刻な発言であり、小手先のゴマカシでは解決できない▼悪化した関係を修復するためには、首相発言を最優先に撤回し、七二年の国交正常化以来、双方が交わしてきた一連の重要な合意を再確認し、その土台の上に友好関係を再構築していく並々ならぬ努力が必要だ▼しかるに七日には中国軍機が自衛隊機をレーダー照射し、九日には中露爆撃機が四国沖の太平洋にかけて長距離にわたる共同飛行をするに至り、また国内 SNS には対立を煽る書き込みが氾濫している。これらは問題の道理ある解決の妨げになるだけである▼日本の首相が「力による平和」という横断幕が掲げられた米空母の壇上で防衛力の強化に向けた決意を表明するのは、世界平和への逆行そのもの。二度の大戦による惨禍を経て生まれた国連憲章に基づく平和の国際秩序をいかに守り発展させていくのか。憲法九条を生かした平和外交の積極的な展開こそが求められるのだ。（中）

会場では、西本さんの「私の被爆体験」が配布され、最後に次のように訴えかけました。「私たちは世界のどこでも、『再び被爆者をつくるな』そのために『核兵器をなくせ』と訴え、『ヒバクシヤ国際署名』などの運動を続けてきました。今回、ノーベル平和賞を頂いたことはこの上ない喜びです。今後、被爆の実相を語り続け、核兵器のない平和な世界を実現するため、命ある限り頑張ります。この共通の目的のために、みなさんのご支援・ご協力をよろしくお願いします」

【第二部】

日本国憲法から核廃絶を考える

『原爆裁判』を参考にして

大久保賢一

第二部では、大久保弁護士が憲法九条と核兵器廃絶について話されました。大久保さんは、二〇〇〇年に「日本反核法律家協会」事務局長に就任され、二〇年間その職務を務められた後、二〇二〇年から会長に就任されています。大久保さんは、「原爆裁判」の訴訟資料を保管されており、NHKの朝ドラ「虎と翼」にも関わりました。

大久保さんは、最初に「ロシアによるウクライナ侵略」「イスラエルのガザでのジェノサイド」の事例から「核兵器使用の威嚇」があり、「核兵器こんな男が

持つボタン」と歴代アメリカ大統領の危険な資質を紹介しました。そして「終末時計」が「核の脅威、生物学やAIの進歩の悪用、気候変動が主な原因で」「世界が人類滅亡の時に近づいている」ことを示すように、「私たちは、こういう世界に生きている。大分岐点にある」との危機感を訴えました。また、我が国における「国家安全保障戦略」（二〇二二年一二月閣議決定）や「自民党と日本維新の会・連立政権合意書」などにおける「防衛力の抜本的強化」「日米同盟の更なる強化」「戦略安保三文書の前倒し改正」「憲法九条改正の促進」など、「日本版『先軍思想』と『現代版』『国家総動員体制』」の危険な動きを指摘しました。

こうした危険な動きに対して、大久保さんは、被団協代表委員である田中熙巳さんが「核兵器も戦争もない世界の人間社会を共に求めて頑張りましょう」と述べた以下の「ノーベル平和賞受賞記念演説」（二〇二四年一月一日）に希望を見い出します。

・・・・・・・・・・

本演説の主題は「原爆裁判」でした。

大久保さんは、「原告の主張」「政府の答弁」「裁判所の判断」それぞれをいくつかの論点に整理して詳しく解説しました（詳細は省略）。そして、「原爆裁判」の概要を次のようにまとめました。

核兵器の違法化と被爆者援護に影響を与えた「原爆裁判」

一九五五年、被爆者が、米国の原爆投下は違法であるとして、日本政府に対し損害賠償を請求した裁判である。一九六三年、東京地方裁判所は、原告の請求是却下したが、米国の原爆投下は国際法違反であると判断。あわせて、政治の貧困を嘆き、被爆者に対する十分な救済措置をとることを求めた。米国の原爆投下を違法とし国会と政府に注文を出したという事で画期的。核兵器の違法化と被爆者援護に影響を与えた。

大久保さんご自身の「原爆裁判」の評価は以下のようなようです。裁判官は「時代に挑戦する勇氣ある人たちであった」「法は核兵器とどう向き合うべきか」について正面から受け止めていた。「核兵器使用が、裁判で争われたケースは『原爆裁判』だけ」である。

「被爆者援護法」については、核兵器廃絶は「究極的」とされており、「核なき世界」は「永遠の彼方」に迫いやられていること、「国の責任」という言葉はあるが、「原爆裁判」にあつた「国家補償」という責任の根拠がいまいにされている。死没者に対して「尊い犠牲を銘記する」とあるだけで補償の対象にしていない。「戦争による被害は国民が等しく受忍しなければならない」とい

う「受忍論」等の問題点を指摘しました。そして、「憲法九条はユートピアではない」「核の時代」の非軍事平和規範である憲法九条を土台に、「原爆裁判」をルーツに持つ核兵器禁止条約を普遍化し、核兵器も戦争もない世界の一刻も早い実現を！と訴えました。

最後に、「まとめ」として四点を挙げました。

(1) 今、日本は、『核兵器を含む武力による安全と生存の維持』なのか、『平和を愛する諸国民の公正と信義を信頼して安全と生存の維持』なのかが正面から問われている。

(2) 『核の時代』の後にはどのような未来社会を創るのか、その選択は私たちに委ねられている。

(3) 核兵器廃絶や九条の擁護と世界化を希求する私たちには、『核戦争前夜』といわれるほど急速に進行している戦争の準備を阻止する運動が求められている。

(4) 反核平和勢力と護憲平和勢力との相互理解と相互協力が不可欠。この国の進路を大きく転換し、核兵器も戦争もない世界に一步でも近づく機会にしよう。

◎ 十一月八日、金沢弁護士会館で開かれた日弁連・人権擁護大会 プレシンポジウムの報告要旨です。

核兵器禁止条約署名の共同提出と 国会前行動に参加

新井田 義弘



【写真⑤】外務省担当者(右)に署名を共同提出する(左へ)濱住治郎被団協事務局長、安井正和原水協事務局長、谷雅志原水禁事務局長=11月21日、東京都千代田区

署名提出に三〇〇人 国会前集會に七〇〇人 全国各地から結集

高市政権が「非核三原則」の見直しに踏み込む中、日本原水爆被害者団体協議会(日本被団協)は十一月二日、日本政府に「核兵器禁止条約」の署名・批准を求める署名の共同提出と国会前行動に取り組みました。三四四万九〇一二人の署名を積み上げて政府に迫り、全国でも呼応して行動しました。

要請署名の提出集會の会場は全国各地からの代表三二〇人で満席に。石川から三人が参加しました。

主催者あいさつで田中照已被団協代表委員は、高市首相になつて「台湾有事」は存立危機事態になりうるとした発言や非核三原則の見直しなど由々しき事態になつていふと批判、「今の政府を何とかしないとイケない」と厳しく指摘しました。

被爆者の決意

日本被団協は、二〇二四年のノーベル平和賞受賞を力に戦後・被爆八〇年

の今年こそ、唯一の戦争被爆国である日本に核兵器禁止条約参加を決断させたいとの強い思いで被爆証言や運動の強化にとりくんできました。

核兵器使用の危機が高まるもと、核兵器禁止条約の署名国は九五、批准国は七四、加盟国は九九となり、世界の大きな流れとなつていきます。それなのに日本政府は禁止条約に背を向け、アメリカと一体に大軍拡に突き進み、歴代政権が堅持してきた「持たず、つくらず、持ち込ませず」の「非核三原則」まで見直そうとしています。持ち込ませない原則は邪魔だという高市政権。非核三原則の法制化をと運動してきた被爆者は絶対許すわけにはいきません。

被団協、原水協、原水禁の 三者共同アピールは画期的

署名提出後は国会前行動に移り、被爆者をはじめ七〇〇人が「日本政府は核兵器禁止条約に参加しろ!」「非核三原則の見直し反対!」とコール。

あらゆる違いをのりこえ核兵器廃絶の一点で共同する大きな運動をつくろうと十一月七月、日本被団協、原水協、原水禁は共同アピールを発表し、今回の共同行動が実現しました。

(原水爆禁止石川県協議会)

能登町議会に「日本政府に核禁条約への参加を求めます」の請願書提出
残念ながら「賛成少数で不採択」

十一月一日に石川県原水協の内藤晴一郎代表理事と事務局の新井田で能登町の議会事務局を訪問し、鍛冶谷眞一町議にお会いして請願書を見てもらい紹介議員を引き受けてもらいました。

「日本政府が核禁条約に参加するのは当たり前のことだ」「参加しないのはおかしい」と言い切る鍛冶谷さんは「わしも精いっぱい頑張るけど結果はどうなるかわからんよ」と言つてお別れしました。二月一七日議会最終日の採決の結果は、「賛成少数で不採択」とのことでした。

鍛冶谷さんと新井田が知り合つたきっかけは、穴水町から珠洲市蛸島間の能登線廃止問題で能登町を中心に能登線存続の運動が大きくもりあがつたころ。能登町宇出津で能登線存続を訴えるデモ行進や集會が行われたときに、当時共産党の能登地区委員長をしていたことで知り合いました。鍛冶谷さん自身はずっと自民党に籍を置いている方ですが、「ダメなものダメ」とスジを通される方で、今回の請願書の提出にも力を貸してくださいました。

(報告 新井田義弘)

被爆八〇年 平和の思いを次世代に 絵本『母と妹への手紙』

「平和の子ら」委員会 小原 美由紀

「母さん、好っちゃん、今年も八月六日がやってきたね。」「今でも、僕は原爆で連れ去られた母さんたちの命を甦らせて、手を取り抱き合いたいという空しい願いを持ち続けているんだ。」

穏やかな岩佐幹三さんのお声が聴こえてきそうな語り出しで始まる絵本『母と妹への手紙』が完成しました。

広島で中学生の時、被爆、母と妹を亡くして原爆孤児となり、その後 金沢大学の教員として石川県に赴任。石川県原爆被災者友の会を創設し初代会長となられた岩佐幹三さん（二〇二〇年九月七日逝去）が、二〇〇八年NHK広



絵本『母と妹への手紙』

（文・岩佐幹三 絵・しょうだりつこ）

島の企画「被爆者からの手紙」に応募した手紙をもとに、「平和の子ら」委員会が制作しました（二〇二五年九月七日発行）。

「平和の子ら」委員会は、被爆者西本多美子さん、亡き金森俊朗さん、川崎正美さんの三人が呼びかけ人となり二〇一八年一〇月に発足しました。被爆者、非被爆者が年代性別を越え 同じ立場に立って、作品を作り上げ表現することによって、被爆体験を継承しようとする一〇数人のちいさな市民のグループです。被爆地から離れた石川県にあつて全国的にもなかなかない活動ではないかと思っています。

・・・・・・・・・・

これまでにCD&ブックレット「平和の子ら」、岩佐幹三さんの被爆証言紙芝居「戦いはまだ終わらない」再編集版、西本多美子さんの被爆体験と被爆者運動を取材したオリジナル紙芝居「たみちゃんのノーモアヒロシマ」を制作してきました。また、実際に紙芝居の朗読やコンサート、ミニ講演などを組み合

わせてお届けする「平和の子ら一座」としての活動も始めました。

紙芝居を完成させた後の会議で、次の制作作業としては、この岩佐さんの手紙を題材にしては、という話が出たのですが、すぐには決断に至らず。実現に向けて一気に走り出したのは、ちょうど去年の一〇月、日本被団協の『ノーベル平和賞受賞』の知らせを受けてのことでした。

石川県の「平和の子ら」委員会の大切な仲間である被爆者西本多美子さんと大田健志さんも授賞式に合わせたツアーで地球の裏側ノルウェーのオスロに駆けつけることに決まり、岩佐さんの望んだ核廃絶へ世界的に大きな一歩となるこの時、被爆八〇年の年に、私たちの新しい本も出版したい、という想いが高まりました。

毎月一回夜に集まって、まずは手紙の文章を見直し、場面に割り振りしていきます。

作画担当のしょうだりつこさんは、そのページ割に合わせてアイデアを練り、資料を調べ、何度も絵を描き、委員会で異論や修正意見がでるとまた描き直し・・・

戦争へと染められていく国民の生活はどんなだったのか、岩佐さんの心に生涯焼き付いた家の梁の下敷きになっ



日本被団協のノーベル平和賞受賞を
歓迎する『平和の子ら』（筆者は右端）

ていた母の姿はどんなだったのか。マネキン人形にコールドタールを塗って焼いたような母の遺体と向き合った一六歳の岩佐少年の想いはいかばかりだったか。妹を捜し歩く広島焼野原はどんな光景だったのか。表現技法にも工夫を凝らして、絵はどんどん洗練されていきました。

「本の終わりにには、原爆や核廃絶に関する資料もつきたい」「西本さんにはやつぱり、あとがきを書いてもらいたい」「被団協からも推薦文があるといい」「経過を取材してもらいたいね」など、あれこれ飛び出すアイデアも、委員会のメンバーが手分けして 得意分野や人脈を生かして、次々と実現していきます。

絵本作成と並行して、被爆体験の継承のために県内の小中学校や図書館へ



絵本制作のため何度も話し合いを重ねた「平和の子ら」委員会

寄贈する資金も集め始めました。制作普及協力金には友人知人、報道や Facebook で知った県内外の多くの方々からの善意が寄せられました。楽しい目標を作って、それに向かつて頑張るのが「平和の子ら」委員会流。岩佐さんの命日に近い九月六日には、石川県立図書館のだんだん広場で出版記念のイベントを開催しよう！ということに決まりました。

当日は刷り上がったばかりの真新しい絵本が積まれ、生前の岩佐さんと交流のあった女優斉藤とも子さんが『母と妹への手紙』を臨場感たっぷりに朗読してくださいました。西本さんと大田さんコンビのオスロ報告も回数を重ねて完成度が素晴らしく、しよ

んの表紙と最後のページに込められたメッセージのお話も深く心に届くものでした。一六〇人もの観客を集め、その日一日で一〇〇冊以上の本を販売しました。

現在は、制作普及協力金を原資に、県内すべての小中学校に順次寄贈していくほか、子どもたちの手や目に触れるような図書館や児童館にも贈っているところです。「子どもたちの平和教育に役立ててほしい」というのがメンバーの半分が元教師でもある「平和の子ら」委員会のなよりの願いです。

戦後八〇年。小中学校の先生たち、親にも戦争体験がほとんどない世代になりました。石川県内の被爆者の数は三月現在で四三人となりました。

岩佐幹三さんはじめ、亡くなっていた多くの被爆者が切望した核のない世界、戦争のない世界。それは人間が人間として死ぬことを許されなかったむごい死、その後の病や差別と闘い苦しみながら生きるむごい生があったから。私が何十年前前から見てきた被爆者運動は、自分たちの保障や権利を求めるものではなく「二度と被爆者を作らない」という誓いを政府に迫るものでした。一人ひとりの被爆者は大らかで明るく優しく、その強い想いの奥底には普遍的な人間愛がありました。正し

い歴史を学ぶ意味が、今ほど大切なときはありません。



9月6日、県立図書館にて「絵本」出版記念イベントを開きました

「母と妹への手紙」(税込み二〇〇〇円)お求めになりたい方は「平和の子ら」委員会・川崎正美 FAX 076 255 5232 dgs-kawa@asagaotv.ne.jp]にお問い合わせください。決して楽しい本ではありませんが、この絵本や紙芝居をつかって、八〇年前の日本に起こったこと、今も日本で、世界で起こっていることに想像力を膨らませてほしい。そして、勇ましい言葉を使う大人たちに「戦争は絶対にダメだよ!」とあったり前のように言う子どもたちがたくさん育ってほしいのです。

◎石川県学習協「資本論」学習交流誌「コスモス」二〇二五年一月号の寄稿文より転載しました。

詩人会議かなざわ「独標」より

チラシ

高久晴美

近頃の新聞のチラシときたら
買い取りの店と
葬祭会館が多い
デパートのチラシなど
なかなかお目にかからない
婚活という言葉が歩き始めたのは
いつの頃だったろうか
この頃は終活が威風堂々しやり出る

そこからの不用品買い取り
そして葬祭と続くのか…なるほど
チラシには希望が詰まっていた時代があった
流行りの服 流行りの口紅
見ているだけで幸せだった
でもこの頃は
家を片付けたら
小金を持つて
少しでもお安い老人ホームを捜す
そして家族葬でさようならなんだね
でもまずは
値段を見くらべ
ドラッグストアのチラシに
心奪われる……朝

【特別寄稿】

いのちを削り、社会保障を後退させる大軍拡に異議あり
医療・介護崩壊こそ、住民が直面する「存立危機事態」

寺越 博之

いま、全国の病院の六割が赤字に陥っています。「明日、地域の病院が突然なくなる」—そんな事態が、もう「現実」として全国で起きはじめています。

石川県内の公立病院を訪ねても、返ってくるのは同じ声です。

診療報酬は上がらず、物価高と人手不足が重なり、経営は限界。救急受け入れの制限、入院の縮小、開業医の廃業—地域医療の機能そのものが崩れはじめています。

政府が続けてきた「医療費削減政策」は、物価や人件費の上昇にまったく対応できていません。医療・介護従事者の賃金は他産業ほど上がらず、人材流出に拍車がかかっています。お産ができる病院がゼロの自治体は、すでに全国で一〇四二を超えました。

医療機関の倒産・廃業は過去最大規模に達し、日本医師会と六病院団体はこう警告しました。

「このままでは、ある日突然病院がなくなります」

「地域医療は崩壊寸前です」

これは、地域住民の「医療を受ける権利」そのものが危機に瀕しているということです。

〈いのちとは何か〉

私たちのいのちは、約四〇兆個の細胞と一〇万種類以上の細胞内キヤラクターが、銀河の星々に匹敵する「約四京」もの連携を休みなく続けることで成立しています。その壮大な営みを、人間の努力だけで守ることはできません。妊娠・出産、病気、回復、老い、そして最期の瞬間まで—いのちを支えるのは医療です。

医師・看護師・医療従事者の存在がなくてはじめて、私たちは尊厳をもって生きることができます。しかし今、その医療提供体制が存続の危機にあります。診療報酬改定による締め付け、病床削減計画、コロナ禍で露呈した脆弱性。六割の病院が赤字で五万床削減の計画が進む中、地域から病院が消えようとしています。

医療とは、いのちを守る社会の基盤そのもの。いま必要なのは、長年続いて

きた「医療費亡国論」から舵を切り、いのちを守るための「医療費興国論」へと転換することではないでしょうか。

〈介護崩壊〉

静かに進むもう一つの存立危機

介護の現場も同様です。政府は介護保険制度の改悪を重ね、介護報酬を十分に上げてきませんでした。その結果、全国の介護事業所が倒産・廃業・縮小に追い込まれています。

石川県羽咋市では、僅か四年間で一〇の介護事業所が姿を消しました。

全国では訪問介護事業所がゼロの自治体が一五、一カ所のみが二六八自治体。

石川県では宝達志水町がゼロ、中能登町と珠洲市では一カ所のみです。珠洲市のあの広大な地域に「一事業所だけ」という現実。

ヘルパーは、高齢者・障害者にとって命綱です。命綱が切れれば、地域で生きていくことはできません。それにもかかわらず政府は、

・介護利用料の二割負担化
・ケアプランの有料化
・要介護一、二の保険外し
などのさらなる「改悪」の議論を進めています。

ある金沢市の八〇代の女性は、要介

護四の夫を在宅で介護してきました。

唯一休息できるショートステイの利用が「制度側の都合で」困難にされたといっています。家族介護を社会介護に移行するはずの介護保険は、二五年経った今、理念とかけ離れた姿になっています。さらに現実には残酷です。

・介護保険料は二倍以上に上昇
・サービス量は二〇〇〇年比で四分の三に縮小

「負担だけ増えて、サービスは減る」市場ではありえない仕組みが、社会保障の名の下で続いています。これを「国家的な詐欺ではないか」と感じるのも無理はありません。介護・医療がなければ、人は、老いることも、病むことも、傷つくこともできません。

医療・介護崩壊こそ、国民の存立危機事態です。

それでも政府は
軍拡を優先するの

高市内閣は二一兆円の「経済対策」を掲げ、その柱に「防衛力と外交力の強化」を据えました。軍事費はGDP比二％への前倒しを明言し、補正予算だけで一・七兆円を計上。しかも財源は国の借金です。物価高で生活が苦しいとき、医療も介護も崩れはじめているとき、そこではなく「防衛費」に巨額の予算が向けられる。

いまの日本政治の優先順位は、果たして妥当なのでしょうか。憲法九条と二五条は、戦争を防ぎ、人間の尊厳と生存を保障するための両輪です。戦争をしない国であること、そして誰もが人間らしく生きられる社会保障を整えること。この二つが揃ってはじめて国民の安心と安全は成り立ちます。

〈おわりに〉

医療と介護は社会の土台です。そして医療・介護は基本的人権です。その「土台」が崩れつつある今、私たちは声を上げなければなりません。

・人権をないがしろにする政治 NO！

・憲法九条・二五条を軽んじ、ひたすら軍備拡大へ暴走する政治 NO！

その声をご一緒に上げようではありませんか。そして連帯し、行動しようではありませんか。

変えましょう。

いのちと暮らしを守り、憲法九条と二五条が輝く社会へ。

今こそ、未来を見据え、立場や信条の違いをこえて連帯し、前へ進むときです。

（全日本年金者組合石川県本部金沢支部執行委員長）

非核石川の会リレーエッセー

演劇鑑賞を通して 反戦・平和への思いを

江口耕平

金沢市民劇場の例会に幾度となく、芝居を届けてくれた新劇の名優の仲代達矢さんが一月亡くなりました。その最後の舞台が、ブレヒトの「肝っ玉おつ母とその子供たち」でした。自身の戦争体験から深い反戦への思いが詰まった舞台は、年齢を感じさせない軽やかな演技に心揺さぶられました。市民劇場が、例会に迎えている新劇の先人たちは、戦争時代に、演劇文化を壊され、過酷な状況を強いられたことから、反戦・平和の思いを込めた舞台を多く創っています。

また、今秋の例会では、こまつ座公演、劇作家井上ひさしの「きらめく星座」は、音楽があふれ、明るく芝居を作られています。音響が、戦争の足音がひたひたと庶民にせまり、巻きこまれる様が描かれた芝居でした。そこには、いのちへの讃歌と、あなた達はそれでいいの？と問いかられたように思いました。初演は、四〇年前ですが、今年、戦後八〇年、反戦・平和な世界へ向うどころか逆に向っているように思える年に、この年のため

に書かれた未来予測のように演劇と出会いました。

新劇の流れをくむ劇団は、最近のモヤモヤ感からか、戦争をモチーフにした作品を届けてくれます。来年二月には戦争前夜の大連を舞台に、行き場のない庶民の呻きをエンターテイメントにしたミュージカル「洪水の前」。四月には、一九四五年敗戦から五一年の講和条約の激動五年間のクリスマスの夜を定点観測するかのよう展開される「グレイクリスマス」そこで朗読される憲法条文は、圧巻です。

こういう演劇を繰り返し上演し続けることは、自分には、ある意味、炭鉱のカナリヤかなとも思っています。多くの方と観劇を通して、反戦・平和への思いを心にとめ続けていきたいなと言いたい、上演が出来ている限りは、まだ世の中が正気を保っている証しだと。

詩人の金子光晴が、戦中の後悔も込めて「戦争反対の声をあげられるのは、戦争が始まってしまえば云えなくなる、今、声を上げ続けなければ」と云っていました。

これからも、市民劇場らしく声を上げ続けるために、多くの方と演劇文化の灯をともして行きたいものです。

（金沢市民劇場事務局）

非核・平和の掲示板

月	日	曜	時	内容	場所
1	12	月・休	13:30	非核の政府を求める会・2026年新春シンポジウム	東京・湯島・全労連会館＋オンライン併催
	22	木	11:00	「ぼくが生きてる ふたつの世界」上映会（2回目：13:30～）	金沢市本町2丁目・金沢市アートホール
	24	土	13:30	2026年北陸原水協学校in富山／嶋田侑飛さん	オンライン開催
	25	日	13:00	住み続けられる能登の復興をめざす被災地・新春コンサート	珠洲市飯田町・ラポルトすず
	31	土	13:30	2026年新春のつどい・春を呼ぶ 平和コンサート	金沢市昭和町・平和と労働会館3階ホール
2	7	土	13:30	2026年新春社会保障講演会／講師 横山壽一さん	金沢市小立野2丁目・石川県立図書館
3	7	土	18:00	石川県保険医協会総会記念講演／講師 田中純一さん	金沢市堀川新町・ホテル金沢4階エメラルド

* 会報「非核・いしかわ」サポート会員を募集中です。年会費 2,000円

自然と暮らし

橋 国夫

漬物用の大根干し

現在は開発の波に飲み込まれて住宅が立ち並ぶ地域ですが、一〇年ほど前はまだ写真のような風景が残っていました。写真は大根の収穫の終えた畑に竹で組まれた合掌のやぐら、その竹竿にかけられて干される大根です。

金沢は雨が多いのでそれに備えるシートも彩りを加えています。写真を撮ったところにはすでに写真のような大根



大根干し



ナベヅル



日本海暮色

干しの風景は珍しくなっていました。

寒さ厳しい季節の櫓に上っての大根干しの作業はきびしく、雨や雪で濡れた竹竿は滑りやすくとでも危険な作業でした。作業をしていた農家の方は「こんな辛い仕事は私たちの代で終わりにしたい」と言っていました。この写真の翌年からこの地域ではやぐらを使つての大根干しは姿を消しました。

迷い鳥 ナベヅル

野鳥の楽園とも呼ばれる冬の河北潟干拓農地、コハクチョウをはじめとする多くの野鳥が冬を越します。そのほとんどは毎年越冬のために訪れる冬鳥たちですが、ときにはあまり見かけることのない珍しい野鳥との出会いもある

ります。

写真の野鳥は白鳥の群れに加わって冬を越す「ナベヅル」です。日本で越冬するナベヅルのほとんどは鹿児島県の出水平野や農耕地に飛来し、他の地ではまれだといわれています。

写真の「ナベヅル」はおそらく何かの理由で群れを離れた迷い鳥として河北潟に降り立ったものだと思います。手前に少し映っているコハクチョウの家族として受け入れてもらって何の違和感もなく行動を共にしています。春を迎えてコハクチョウが飛び立つときに一緒に故郷へと旅立つのでしょうか。

夕暮れの日本海

師走の夕暮れ、日本海の海岸に立ち

ました。瀬戸内育ちの私が金沢に来て感動した一つが日本海の夕景でした。

島一つない水平線のかたに沈む夕日の美しさは特別のもので、知人が金沢へ来るたびに水平線と夕陽というスケールの大きな風景を見に行きました。写真は雲にさえぎられて夕陽は見えないものの夕焼けの色と荒れる日本海の波と飛沫。やがてくる新しい年の「変革」を示すような風景として感じる時間でした。

(金沢リアリズム写真集団)

【編集室より】

金沢の写真師・橋国夫さんには今年一年、県内各地の「自然と暮らし」を写真と文で辿っていただきました。深謝いたします。

絵手紙コーナー

金沢医療生活協同組合

絵手紙班

竹味恭子

